

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第832号 平成26年11月10日

卒業せず

読売新聞の「大学の實力」調査の結果、卒業学年で留年した学生が、今春10万人を超えて6人に1人に上る事が明らかとなりました

10万人を超えたのは2年ぶりとの事ですが、大学側によると、留年の理由は卒業単位不足の他、企業の内定を得られなかった就職留年が多いが、今春は、内定を辞退して留年を選ぶ学生が目立つそうです。また、海外留学と春の就職活動時期が重なる事も留年者が多い一つの要因だとしています（7月20日付読売新聞）。

海外留学の場合、卒業の時期が日本と異なるケースが多いので、就職活動が旨くいかず留年するというのは理解出来ますし、土壇場で単位が足りず卒業出来ないというのも、好ましくはありませんが、仕方のない事です。

ただ、今一つ理解し難い事は「不本意な内定を断り、あえて留年して納得できる道を探す」という学生の心理です。

正直、1年留年したからといって「自分で納得できる道」がそう簡単に見つかるは思えませんし、そんな理由で折角の内定を断るといのは、世の中を相当甘く見ているなと感じてなりません。

以前は、「内定が得られないために止むを得ず留年した」という話しを良く耳にしました。最近景気が少し上向いて来た事もあり、学生の意識にも余裕(?)が出て来たのかも知れません。しかし私としては、学生自身の認識の甘さはもとより、軽々に留年を許す大学側の指導、特にキャリア教育の在り方にも問題があると指摘して置きたいと思います。

第1志望先と第2志望先の両方から内定があったというようなケースの場合は、第2志望先の内定を断る事態となりますが、その場合でも、第2志望先への礼を失する事の無いように気を配る必要があります。何故なら、第2志望先である企業の大学への心証を悪くすれば、後輩の採用試験に影響する可能性があるからです。

「不本意なまま就職するより、自分の目指す道に進みたい」という気持ちは分かりますが、それ程の強い思いがあるなら、最初から不本意な会社の採用試験は受けるべきではありません。

内定のあった会社は第1志望先ではなかったかも知れませんが、少なくとも第2、第3の志望先ではあったはずで、採用試験を受ける以上は、内定が得られたら就職するという意思はあると考えるのが普通感覚です。特に、企業の採用担当者はそ

う考えるでしょう。

勿論、第2志望の会社から内定をいただいたが、本当に入りたい第1志望の会社からの内定が遅れて届いたため第2志望の会社からの内定を辞退する、というように事情止むを得ないケースはあると思います。

しかし、第1志望でないからといった理由で採用内定を辞退し、大学を卒業せず留年するという選択は、内定を辞退した本人は自分の意思を貫いたという事で気持ちは良いかも知れませんが、採用しようとした企業の側からすれば誠に失礼な対応だといわざるを得ません。特に、内定を受けた学生が初めから採用試験受けていなければ別の学生が内定を得られたらと考えると、手前勝手な理屈で内定を辞退した学生の、そうした他者への思いが希薄であるという事についても、非常に問題だと思います。

また、折角の内定を断って留年したからといって、翌年には自分の思い通りの結果が得られるとは限りません。というより、思い通りにならないケースの方が多いのではないかと考えられます。

仮に、思い通りの結果にならなかったら、またまた留年するつもりなのでしょうか。内定を辞退した学生は、「そんな先の事は考えていない」のか、それとも、「来年は旨く行く」と考えているのかも知れませんが、企業側だって大学を留年した学生についてはその事情を当然チェックするはずですから、その意味では留年する事によるリスクはあるはずで、そうした留年する事のリスクに考えが及ばないとすれば、その学生の将来は大変危ういといわざるを得ません。

年寄りが余計なことをいうなといわれそうですが、少なくとも、そのリスクを減らすためには、留年した後の1年間を企業に対して説得力のある、意味のある1年間にするしかないという事を、老婆心ながら申し上げて置きたいと思います。

(塾頭：吉田 洋一)